

岡山県北で支え合う経済圏づくり 津山市がバックアップ

2023/7/26 20:02 | 日本経済新聞 電子版



TEGOUの佐桑代表は「クリエイター同士の横のつながりもできてうれしい」と話す

岡山県北部の津山エリアで企業間の連携が広がりつつある。製品開発での協業のほか、地元企業のウェブサイトを生産地クリエイターが制作するなど域内循環の事例が増えている。津山市はかつて「県北の雄都」とされたが、2020年に05年の合併後初めて人口が10万人を割った。15年にできた市の外郭団体「つやま産業支援センター」が後押しし、持続可能な産業基盤づくりを目指す。

「地方はお客様の反応が直接わかり面白い」。ウェブサイト制作の合同会社TEGOU（勝央町）代表の佐桑充倫氏は目を細める。製造業の自動化支援を手掛けるIKOMAロボテック（津山市）の依頼で新たなサイトを3月に完成させた。

佐桑氏は津山市に隣接する勝央町の出身。岡山市内での勤務から38歳で県北に戻り、21年に起業した。前職時代の顧客は全国的な大手企業が多く、独立後も県内の他地域の企業が中心だったが、津山市の企業の仕事を初めて請け負った。

結びつけたのは産業支援センターが22年に設けた「津山クリエイティブ人材ネットワーク」だ。「地元企業の生産性を高めると同時に若者の仕事を増やしたい」（沼泰弘事務局長）と

地域のデザイナーら21事業者を一覧で紹介。「サイト制作の余裕がなかった」というIKOMAの担当者が、同ネットワークのホームページでTEGOUを探して依頼した。

地域にはIT企業版のネットワーク「つやまICTコネク」もある。看板製作のサインアート（津山市）は依頼主などの情報をエクセルでまとめていたが、社内で共有しやすい契約管理システムの導入を検討。同コネク会員のソフトウェア開発企業、ソフィア（同）の紹介でクラウド型のシステムを導入した。

これらの企業ネットワークの先駆けは、15年に改組したステンレス加工業のグループ「津山ステンレス・メタルクラスター」だ。7月時点で45社が参加し、共同受注や交流会で技術を学び合っている。

岡山イノベーションコンテスト2022でグランプリを受賞したマクライフ（津山市）の膜材を使った天井「マクテン」は、クラスター参加企業のアイダメカシステム（美作市）の協力もあり生み出された。壁に金属部材を設置し、ガラス繊維製のシートを水平に引っ張り上げる仕組みを考案した。



笏本縫製は自社ブランドのネクタイが売り上げの7割超を占めるようになった

つやま産業支援センターは現在、津山市職員8人を含む13人が在籍。年600回以上の企業訪問で課題を聞き、事業者のマッチングや個別支援にあたっている。事業者に寄り添った活動に各地の自治体も注目、視察が相次いでいるという。

ネクタイ製造の笏本縫製（津山市）はかつてアパレル大手向けのOEM（相手先ブランドによる生産）のみを担っていたが売上げの減少が続いていた。15年に自社ブランドを創設、立ち上げ当初の販路開拓やPRをセンターが支援した。コロナ禍の中で自社ブランドが経営を支え、現在は売上げの7割超を占める。

3代目の笏本達宏社長は「センターがなければ会社存続が危うかったと思う」と話す。最近では周辺の町工場の事業承継が進んでいないと感じており「経験を伝えて地元に戻元したい」と考えている。

（藤井太郎）

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.